菟玖波集

十六十七

へ5
2110
6

菟玖波集巻第十六

雑連謌五

竹下親王の名字をえらん

二品法親王

かはたけの園竹の跡なれは

此身をはとゝめおくらむ

関白前左大臣

おほしたてしにおもひそなけく

親の跡

倉持氏印

思ひ出おほきむかしなりけり

前大納言為氏

いまさらもうきにはかなき名のこる
人ことの世にある業は苦しきに

夢窓国師

いとゝなほなれしうきをこそしのはれ
おもへはたのみに物やおもふ世

権大納言良冬

うれはなきところうき世なるらん
人にしられぬやまの夕暮

尊胤法親王

山かけにおもひしまゝに住なして
暮しなくのこゝに猶ゝもとの身

久良親王

うきことに猶捨かねぬ人の心かな

源氏国名を賤か連歌に

伏見乃里に心とゝめん

前中納言定資

世を捨ぬいつもやかくてすさまし
あるかなき身にをしへしは迄

導誉法師

捨はてゝもあそびらきぬいつ命にかへす
前大納言為氏常在光院にて三首題詠に
いとひても亦友となる身本性

源茂篤

捨る身はうき世になきと思ひなに
まよひ心まよふ夢乃うちに

大江成種

あらぬ身やうき世をすてゝおもふらん
跡なき夢の身たにもさのまゝに

他阿上人

いつまてとおもへは老もあはれなり

世をのかれて其ほともなし
良尋法師

墨染をきて後くやしめる
世のうきを思ひ入ぬる道まきそこ
善阿法師

かへりぬ色そて墨染のおそき
おく後のをりも 桂秋の風
仙門法師

世をいとふよし野ゝ山のおくの庵
と侍千 常盤井入道太政大臣
ねもおもえぬ身をいかにせん
ひとり住む山のかけにはゝ住へき
権少僧都永運

心のともや身をおもふらん
たもみけるはるよりしくの夢
源忠長

もろともの涙そのうみ尚まよひを
なにとむさ給心なりぬらん

顕阿法師

朝露乃あるなる世とは知なから
心のうちにやうきは我ふらん

本誉法師

うき世のうき流を夢の世なりせは
何くなる我花の色をもうらみにも

源有方

うき行世乃ならひに我知遠色
志ありなから住は山さとの

源氏頼

いつくにも心とめしを捨流身所
月を知ぬや深山木のた

救済法師

まよひつゝ家に郭もかり住なりけり

心にくも世をいとふ一の事

明覚法師

ことふかき志ふかくも夢を捨つ

かくよそに身をは捨てし

寛胤法親王

かくれ家の道をいふ法筆の雲

さらぬ見なるこそ浮世之内

藤原道直

おく経家に心を行まくは住すす

暮の鳴らぬ人ならぬらん

法眼村意

かくれ家の山と思ふに道ありき

松風の音き法かなき

祐賞法師

ひとり住山の菴に留さしこす

たくすみも世に住へし家

周阿法師

わふなむ秋の春ぞ心から
またに霧有明の清き
藤原助茂

あはれさぞ涙もましく住む山に
あしの根のうきよをさへ知らぬながら
前大納言為氏

よしやつきなく世をなぞ背かし
ながし流水も春は引くなり
前大僧正道玄

心もまつせぬここ憎し（く）
露のあしたの夕の清
高階重成

清く有る心は身をも南せぬ年
持ちの菊なれ宗阿庵
二品法親王

山もあさおやうき世なるらん

心まつ帰らましいうき世にて

前大納言為氏

身をかく山を猶ふかくなれ

住む人もまれなきりの蓬にて

藤原高秀

世をへりける旅のころ風なき捨

うき世にや捨る墨染乃袖

藤原秀光朝臣

白露の空のなごりも涙にて

夕乃雨雲しく波乃音

神尚清

身をしる人ならも袖沾て

猪渭法師

うき世捨むしになりにおもゝらん

人ことにならぬ別と朝りにけり

権少僧都快宗
命世老のうきをしる事歎
物なくぬこの果をしらすれ
前大納言家明
在すゝ世にひたすら物と家師
兄しこえの言にたえぬ歎
法印時実
このゝいはゝ闇く人のいへ
人のむくひのまことこそきけ
いく度か家をかまへて生れにし
うきおもても捨る世もなし
性遵法師
あはれさへなけくは老の命にて
関白内大臣に侍りし時家の千首に
年ことにいまはいつの
救済法師

老ぬれはいとけなかりし心にそ
むかしの庵その山のおくなる
藤原長恭
捨はてし身を無きかすに書おきて
今は世もうきをもいとひ知なから
平親実
あすしらぬ後の身をも思ふかな
昔しる名こそ古き道よしのの山

常盤井入道前太政大臣
世をいとふ人いつくに住そ世
いはきくの山のおくの庵なれは
二条法親王
中々にあるにまかせて世は捨し
人のこゝろや仏なるらん
導誉法師
此度そむきはてぬる世に生れ来て

かゝる世に生れ来ぬるを思ひしも遠

応阿上人

おや子と朱ゝも契ならるゝや
幹あらせるやなけく　村鶴

前中納言宣賢

子をおもふ道の苦しきおもひにそ
花をなくなく志不堂　我部

椽海法師

あゝ世をも人をも嘆と思ふをそ
涙や袖のしく恵なるらん

藤原家平朝臣

うきことを数ふる年のなかには
十年ひと昔も頼むのこゝや

良阿法師

名のみ子の友まもこの玉もうるはしき
安らかにまもれ我さり清　家郎

安部為信

もしながらへ無からふもにしへ
夢にこそ語いくらひ別るらん

相阿法師

まよひ乃身ニ教ゑのみちしなき
頼まれぬ節をかきりいさ世にすむ

蔦木田長範

あなかまくいつ年かふのいにしへ
花の枝をやおり法くらん

本照法師

薪と法おの遣のなきまゝ年
家とさらいむ法隠家いなし

丹阿法師

捨るや人にこそ後を任すらん
家のたしつをむかし成りけれ

大中臣実直

梨壺の其名そ継る跡なれや

月のよ女房あまたいてきてあそひける
なかいろはの字を句のかしらにおきてよみける
連歌ありしなかにゐの字にはまかりけるを
とこそおり付けるなれ

永明門院宮内卿

流水の琵琶乃音高き月の夜ことに

同院右京大夫

ぬれなるものをかへる人乃袖

人のまへ清きさんそく宝のかたきま乃

なふてなしてはといふ哥をよみて人にみせ
あはせなかをやりて此歌を書て女の許へやり
てなかを女のもとへまかりて侍りしにいひ出しなる
比公はむろかやしきをぬれまかりにけり

實方朝臣

えこそはいはね思ひなからも
かくまでしるとも何尋ぬらん

権少僧都永運

○

やぬ車乃めくくるあり清

二品法親王

法ふまて其月をもたのむなる
いのちおもつきぬ末なしりき

十佛法師

老のいちぬりけ髪の子を持ちて
若しの友年今は寒ひぬら

那英法師

人まさる永老ぬるやまた侍る

藤原倫篤

柴乃戸は志清ふまて猶住へきまて年

應保二年の法月の夜法性寺入道関白
の女御女房ともさそひて月見侍りける年
女房の中より
月ふまて雪降る雲の上は何にと云
他亦女房の中より人まさら
きへてあらつきかくちこそまさ

堀川院の中宮にさふらひける年雪
いたく降りける亦の朝まいらせ給ふの枯

ある蓮の宮律なる法をよみ書を冊簾
のあるにさし入て是を御覧せよと少将の君
に奉り給ふにうくもうのにむかひけり

よに人不知

ましくらくに我かき心をまとぬる

藤原義夏

時ゐるゝかたきあるきの身なれとも
おとに法またなき底の玉川

前大納言為氏

かくれ家の庵は人にいとひもせす
法はれさゝの枝の一むら

導誉法師

世を捨るあまたの人にあひもせす
あさましきは一方にはしも捨もせす

藤原光常

月と花とたのしき世なりけり
かくれ家まても秋を待来

円阿法師

山の入月やうき世の出ぬらん
人ことに拙くましき心ならす

関白前左大臣

うき身に何の幸ひかあらん
露なからえひさの上に落ける

二条法親王

嬉しきは観の中ならこゝろ子

おもひとる法より身をハ捨たれや

前大納言為氏

なかくハ心のまゝに住もあき
こゝろもいなしむ紫の庵

木鉄法師

住ハいつもうき世なるへし
ここをまてそやの心に住々

寂意法師

山里乃あはれうき世のこゝろかな
花に梅こそ似ぬうき身なれ

素阿法師

捨しられ身は埋木のことくにて
人いつかたか家を待らん

十佛法師

身法くふかいつまてこそ隠し法逢
あやうきうて身をはなるゝ也

藤原宗秀

三とせおもひ後に言の葉はいひ出せ
鐵のひゝきもなる木かくれ

藤原秀氏

柴の戸に明くれ松の風如きも
もとの身なからあとうかれなん

導誉法師

捨る世をすてゝもなきはこゝろなく

身をかへて思ふ日しも別なくて

救済法師

しはしいつまて世々の親母
谷ふかき清入相の鐘

関白前左大臣

このうへに命なからひも思はしや
すきしとめくく涙またる哉

後嵯峨院御製

いくとせも歌この法も道老ぞなき

元亨元年十二月十二日禁令食行幸
侍りける時歴代の奉行平成輔朝臣
歌を用意しけるか聖帝に奉りし
急ぎ上りける

民部卿為藤

さらに法きに先り移へ法きよしむ哉
と何年少納言にさゆみ付侍りし

前中納言具行

昔しは好み年たまひし法く

邪念食にこゝちえきあらも有しらぬ
迷妄も二ツ年古き論をおもひに侍りけれ
にや

菟玖波集巻第十七

羇旅連歌

関白内大臣に侍りし時家の千句に
うらとてもとふもなくさとにけり

救済法師

松原の汐干にかゝる旅の道

出しほの月をうらめしまちわぶ

信照法師

旅衣たち来てくらふこゝの原

旅にゆく関けハ山の松風

導誉法師

古郷の花をミすてゝ出ぬれハ
きはふまてハ花の逢山

関白前左大臣

東路ハ都を出て旅のまくらにて

法常入道関白家に人々あまた旅
といふ心をおのおのいへるに
もよほしなく人に出行にも

前中納言道方

出て來し都の夜の月とともに

赤染右衛門

ゆくさきに待らん人をおもひ遣
ゆめ見ることハ旅の夜の庵

大江成種

みやこ春の花の関屋に旅寝して
浦にうつす秋風そ吹く

寂意法師

月出る山さへこの浦船路かな

古ゝろは秋に出にしとゞめよ哉

藤原氏政

あつ明はまつは宿にて就月

出るは出し都にとゞ見お哉

會增法師

閑や名残に浦月をたに見き

せきやの秋さへ風の音

海遠宗信

旅に行山も月にねまりすゝ

月もこなたの古さとの山

藤原高秀

人も知し旅寝の秋ぞ憂おもふ

多ひろあはれに寝にとすて置

救濟法師

忘れしな山路乃末ふくら乃秋
松風も波ハ清見か関守なん
藤原為顕

あとなき月夜舟をおくりし
なれましと人も旅にや出ぬらん
平高業

波乃より来る月乃影も松
帰るさき古郷ともやハいはくら世

権律師定暹

月の夜船乃ゆく方乃松
影もに移り河猪のなから哉
前大納言為家

東路や野島の秋乃夕をこめて
このまて影まちなる旅人
権少僧都快宗

月に行道ハ明らをかき
くもらぬさくらす

古寺に詣て帰るとて出侍りて

十佛法師

関こゆるまてあ里ける月

鈴乃聲にも秋風そ吹く

常知法師

夜るそ深山路ハ月にさそハれて

けふの旅ニ越暮この里迄

藤原助茂

月出ハ夜もかゝむと里いそくし

きのふもけふもいそく道哉

中原遠康

末ニうし山なる月ニ誠ほきてす

旅と秋との心かゝる哉

源實法師

夜こゆる山路の月ニ行法も

宮古なる帰る路のみ忘るらん

安倍為信

旅乃名残り乃あかぬの月
たしまい秋さしましとくまし

法印詔清

立明た夜舟のうら手まくしあめ
せめくい寝こや夢を結まし

三河法師

月をこ奴秋の末野乃草枕

文和二年六月世間さはかしかりし
ことありて美濃國を島といふ所へ行
宮ありて侍りし所に同七月の頃なるを
まうてし侍りし

越しまの里い吉く秋の風と
侍りき

関白前左大臣

旅手あ淋このくお山乃うき秋小

同し所にて

結ふる手あ淋い旅乃玉清さ
石のなくなる井の故さと

啼くやう流の聲たこの山
常暁法師
野に伏して跡も枕も露深し
冬にむ久ゑて旅もものゝ丈
法印宗意
花もなき野寺の草葉を踏分て
末にある法山をも尋誠なまし
越智孝康

あかつき時雨乃なかき夜の空
風に流れ水に流むる雲の林
寂意法師
系も行山を時雨のまゝ誠す
小野の社千句の中に
遠山や〳〵のあかくに滴ぬらん
二品法親王
舟路の雲霧なくに流るゝ奴
春の野まゝす吹く山風の音

殷海法師

冬の夜もさむからぬかな綿衣
きてみれはけにあたゝかし色

権大僧都実恵

雪ふれは袖うちかけし綿に旅も
京駒のあしなへむまてりは夢にくく

前大納言為氏

山のかけちいのちになくなくちや

越へし関こそありき山なれ
あしからの坂東の道は仏の下

寛方朝臣ころものくろ宇津の御のくたるとて東三條院へ京よりくたりけるにかはけ物語ふさそへて給ふとて

侍従典侍

ころものくろの衣の関は此物きと
と侍るは

寛方朝臣

きくさ勢ふさうせたのもし文書

三枝ともりを少しそへ侍

平堯重

関守ハありしやなかく居のまゝ

まくら夜ハ妙のきぬに出家旅人

藤原俊郷臣

川舟のとまりぬ波に月をとゞす

旅寝のきぬにハつゆもなし

性道法師

野山にも草の枕をこのりなきを

おもひおくつき露のくへつた

前中納言定家

枕ゆふこよひをかりの草の庵

元亨四年亀山殿にて

こゝやまの庵ふ年の経ぬ道ハ

民部尚藤

妙なる体こゝやなかくに 妙道も跡妙りを

後鳥羽院へ奉りける歌の中に

従二位家隆

山路より深く峯の雲

誰の道かはしきまさりて見えけり

左近中将義詮

きのふのやままよふの山

けふもまた法くまりの幸見め

二品法親王

山誰の末遠浦にや来ぬらん

何法つきりそかふ無しなもなし

導誉法師

あたるこちをそふ法不二の根

おもしろもあめくをふ

木阿法師

空古のく閑法る帰しをふそえ

雪千跡あ法道を岑くなき

源信詮

我ならて夜深き関ハも越し

きゝ出やらぬ関の旅ひと

法眼栄懐

鶏の音も夜深き里に鐘ゆへ

あふ坂こえて旅いそくなり

祝部尚長

鳥の音や跡なき関に鳴らん

門さくなほ山もとの里

晴阿法師

旅にまた君おもふ人をさそひきて

なれはまさるに寒き松風

本阿法師

夢結ぬ旅寝幾夜と数ふらん

草まくら所々にむすひつゝ

荒木田武範

旅寝乃ゆめぢやとにまよふ
人をとふは山中乃道
　常智法師
夢に我本住も帰る路に迷
古近の里をは許に夢まし
　菅原田守藤
夢みぬ行山中乃うち
旅ねにもまくら枕なしへ法

　藤原範高
夢に来く古郷人やまちわらん
かよはむ路に我嘘をし迷
　大中臣憲家
君は帰く里は旅寝に夢さへそする
きのふもけふも人乃別路
　宏元法師
旅ねや宿ゑ日ことにかはらめ

橘やむかしのこゝろ忍ぶらん

中原遠藤

かけなびく山をうつる人

捨ありも捨るの世やくかなし

禅厳法師

道ゆきき夜半宿を出なん

さる時まつゝ夢かたもなし

源時秀

風まよふしらやまの雪や捨給しと

まよひ出やらん出家捨人

藤原高秀

鳥の音数聞なし山本まちまち

うきも人の浮しきこゆり

前大納言為氏

捨衣きくくも望なんうき浮乃やま

松のみけより須や出く覧

救済法師

川舟乃海にのまゝ漕へ行
法のうつにも法聲有りや

藤原俊顕朝臣

人しれぬこの川舟にのりてゆく
さすらへ川あとをしらぬ思ひ人

二品法親王

河舟に乗なくまち添 旅乃袖
浮世にや乗りのうちを守らん
まこと人不知

水ぬるき川のこなたに駒とめて
まつ旅人や里を出らむ

高階重成

渡るへき川のむかひに舟よせて
こゝ路乃霧のさびしき月の夜

平維遠

うき旅を我も言なれく友千鳥
多ひのあとふ塩竈の浦
円阿法師
夕凪のまがきが島に舟とめて
浦にも暮のこゑは立日李
祐阿法師
舟人もなき浜の舟に日は暮く
あやく行水のちらぬ流れん

藤原助兼
こなたへ旅にわかるき川音
其日乱遠き旅に暮まよひ
覚情法師
浦路風をも船路なりまし
月の夜ころもたちにあくがれて行
惟宗秋孝
舟とめし旅の浦ぞ年こそき別れ

里ニ寄かる旅乃行衛

源師義

漕舟ハ浦つたひに帰り来す
志たし此まちハ月や待らん

源頼遠

浪とふきハ湊の夜ふかく出ぬらん
船とおもふ波をこそ聞け

藤原貞直

浦千ある浪やうに千鳥旅寝して
いなを吹てつ宿を清れ行

慈寿法師

誰も旅なれはよらし乃舟
かこの心そ伊勢にまかせん

宗阿法師

清くしなほ松浦のうらハおもをし
岸乃下行く舟の上浪

藤原経直

けさはのかすみに舟そこきよする
から浦や氷と空のミわかすらん

丹治政職

水くらき夜舟や行もしらなみに
ほたきもちらし山寺の道

南仏法師

舩まやき跡ふさきなく浦風のます

近江国佐々木金剛寺にて千句の
連歌侍りしに　　源頼氏

清らふ法清らき家手長流之と
いふ句に

救済法師

清川の水のうきたし清なきらく
松しきミ緑のよりまさり
比山をたちえハ故もよもえへし
むまやの鐘の山ちかき声

藤原倫篤

夜ふくる人なや関にとゝむらん

参議雅経ともなひてあつま人
まかしに風にうき清の山をこえ侍るとて
かへ命なりけり

鴨長明

むかしにもかへて見まくの清乃山
こゝろ清ののちを打こえてぞ

参議雅経

いにしへやこの人に清へ世を
一夜の夢をみはてぬ哉らん

兼胤法親王

里遠きあらしの音を聞くらす
旅とて見る旅の道に

左近中将兼詮

越えし都の山ははるの雪
夜舟たき行らちなきの音

道朝法師
月にけふ越へぬ山路のさかもの哉
夕霧きえやまはけ半に立けり
法眼良澄
むしやあふさもへこすさかしん
雪ハらく流きて猿乃夕暮
藤原知春
不盡乃根の夕け行道ハ野宿也

ゆきもなふ石やゆきなく覧
仁賀法師
今はゆきの旅なる人乃帰るやま
まよく来ぬやとるの前も見ぬ哉
神直副
たちきえ雲井亦むらさき乃山
ゆきゝと鐘とおともありの法の聲
導誉法師

寺ちかき山路乃関を越ぬらむ

小野社千句の中に

うらなミきけは河音もなし

二品法親王

舟をしやき跡に遠ざかる山の端の里

涙ミつぬ袖の浦ハ濡ぬらむ

前大納言為氏

もろこし舟もまちやよせこし

阿しうき名を浦なる里に棹思ひて

源高宣朝臣

八重乃汐路を舟や行くらむ

さきる浦人手藻をたく袖

関白前左大臣

舟出しあかしの浦風ぬれくるる

波の音も志ほに出ぬるの原

後嵯峨院御製

八十しまかけて出る舟人

みなれぬ松の小枝の苔筵

後深草院弁内侍

さ乃世思ひしらし旅のかなしさ

なかゝのいつくも月をやとしまな

前大納言忠信

行末も迷はれぬものを難波江の

なを清なる路奴影こつ後の奈

後深草院弁内侍

沖なかにまかせは舟の浮たる縄

とはの旅覚えていとゝ悲しき

従二位家隆

駒誠この岸川乃旅まくら

契りあらすや立とまるらん

前中納言定家

おもはとそおもひぬつき起る井手

濱も山もの中なかれて末遠

浦の名ありし行旅に

二品法親王

清きと見しハ夜の宿

救済法師

東よりちかくなりぬる嵯峨野ハ夢そ

山端とこそ詠めし月もなし

前大僧正賢俊

舟まつ岸くは袖やぬらん

旅の日数ぞ哉ともなし

左少将善成

風あれハ暮きも近き船路かな

跡ちなきあやうき波のうき橋

権少僧都永運

うちわたる河瀬の駒のひかへける

弘長二年八月仙洞庚申連歌

風のまにまにをまち哉

福光園入道前関白左大臣

和田の原行衛も知らぬなミの末
たま川の波のうつ葉風きくへき

前大納言為氏

好ゑ乃うき絲ハ浪にもなし

熊野御幸の還御乃時加那梅か本にて
ふく為いくよ降りぬるも

後白川院御製

かみなきあき年ふるとしも思へ

従三位頼政

おひけくいとひさひ雀をめく浪とも
建保五年四月庚申乃頴まて歌小
許ゝさきらむおもの乃ともやそ

正二位家隆

まつ志もし浦ちも更ぬ小夜千鳥
いつ誰かかん誠乃うき人

前大納言経継

関の戸ハ浪音もきこえ清見かの

嘉暦二年七夕内裏百韻

秋まつき往来の道をいそぐ覧

後光明照院前関白左大臣

きのふ見し関をこゆるもしら浪

まつ立人をとゝめまし

前右兵衛督教

波のよる落くる滝の音やかはるらん

涼しき淀に道をさそふらむ

称阿上人

うき草なかるゝ船を行らむ

松の枝うき月をまつならし

寂恵法師

捨る身を三輪の山も世は更に

好衣のさむき捨ひと

素阿法師

きゝふるしぬるをふの道山深し

おもひやれ後の世乃道

藤原信藤

くらきよりくらき道おもふとて

筆捨山ちは浦の浦にをす

藤原親長朝臣

うきのからや汐干なからん

古郷へかへる旅をしらせむ

法眼邸重

舟路乃末の沖津しらなみ

松本ひゞき乃浦風そふく

常盤井入道太政大臣

たきつしくかたの塩瀬の清くし舟

家にて行路百韻連歌侍しに

あしの屋と塩やく海士のいとまなき

関白前左大臣

風あらし吹よせてさくる来にけり

雲もかゝらもうきしまか原

権大僧都忠

舟にても旅をするかの海遠し
よその里にも衣うたるゝ

導誉法師

あまをふねむすはしやも舟も程近し
須广も明石も舟の通路

救済法師

こゝろしも中〳〵旅ぞおもはる
山よりなかめ秋のうら風

性遵法師

夜舟漕あまのあまみし月こそ澄
いとゞみやこぞ遠さかり行

順覚法師

うらにこゝろて河船さくの里つく
心をあへさりし旅の道つな

兼意法師

浪早き川瀬のなみをさす棹
昨日も三日もなき法師哉
頓阿法師
こき帰るおとなやきこえ渡し舟
旅にはいさよふ友もなし
二品法親王
行舟の浪のうつゝに漕る川
も里の木間やかけ染る
木食法師
浦遠くなきさの舟の漕いつゝ
あはれ法師がさらに世
従二位行家
あさ手つ法師のさゝやのかけ柱
人くまれのさしはさまつゝに
夢かる峯の夕霧のさまよふに
後鳥羽院御製
こなたの里をいそく旅人

はまさ夜ふかく旅に出ぬる
鳥の音も関乃戸あけて待まゐ
うやこまゝ清ら夢の通ひ路
信実朝臣

やりつまくら同し旅寝にさまさめて
見ぬ世はいきのふなれとも忘れぬ哉
隆祐朝臣

旅人かけ流や野乃夕暮
按察法師

いはくのうらに衣うつらん
藤原家教言朝臣

玉志まぬ松の夕戸の旅のうち
むしろ半出入る月の影更けて
頼英法師

浦こく舟やゆく行遠ふらむ
月の行くらの道に関守へず
常智法師

さ霄乃せこ墨須広乃うら舟

踏くまれて雪の下草跡もなし
前大納言忠信
獨り行くのちの始末のあら
救海法師
うき世捨の明のかしましち
やまとか家とや秋をまち过し
善阿法師
野中なるあなかしも末の世には
なほなほ歎もなきや露あらん

源宗氏
たゆらと吹ぬる風し武蔵野
寒く染り行明月の
信照法師
晴てかなしれ出る袖こそ井
行末の野りありいはかりかね
平景清
おのが一法の名の音
禅深法師
古今著聞誰、心にもあはれものを

東方旅のたひさしらて

藤原時綱

まかくましのみえ里の名に立て
吾妻路やいやこも春の野辺

惟厳法師

きのふ越山路の古郷
一夜宿のかさなりていつくもおなし

寂蓮法師

古郷は立出しこそ朱に見ゆ

夏草のしけりたるをわけても

前大納言家

行きなやみ野中の泉ぞ
家の千句乃中に
旅の夕もとの露結びなん

関白前左大臣

浪のうへの思ひ夜は人に見す
こきかくしくいきし浪 舩

二品法親王

旅人のしりへもかへりみす
野山の月乃夕暮の空

道誉法師
おほくはせてゝ寺をも尋ねきや
此國の道をはふのつにおしく

十佛法師
草のまくらに如せ旅ひと
こやこや宋所の夕暮らん

前參議藤彦良
しるへなき旅にはなれぬ身をさへ
古郷人をたき古郷乃由見

源頼氏
聞もせず見もせぬ方に旅寝して
旅寝乃夜半そなく虫行

導誉法師
古郷も思年帰るなりぬらし
跡なくして野は果もなし
いはくもりまよふ如を草まくら
夜如つき雲をこは乃松原

兼好法師
清見かた月をあけぬと関越へて
人やまたいたにもあかぬ別まほしく

さこそ末もいかゝさはく見
千句の連歌の中に
始るも終もしらぬかな
導誉法師
うちむれて旅行道のせはゝれて
みやこ恋しきいさよ乃中山
藤原秀吉
あ清き路乃露分衣志おゝれて
谷深き紫乃扉乃霧に見えて
前中納言実家
みやこを恋ふ涙袖やぬらすらん
乾元二年三月内裏連歌に
ふしおハいかなるのら涙もなくらう
後二条院御製
始なき帰涙も旅の道なれや
花あるきまとく袂にさそはれて
後宇多院御製
春もこ人を忘てしとまれ
山路乃月のゝ寒きかせ
前大納言為氏
旅衣数ゝハ嵐のやとるかな

風早き沖なる舟の綱手なを
兼胤法親王
ひくる浪こそ物はさはりあれ

玉札の文字をさへたくに書留て
源氏頼
其の関守の旅乃おもはれ

多收ふ家を尋来物を世
禅永法師

文かよふ旅の山路を急ぐれ
明きたよう流乃一流ら
南佛法師

旅乃うき涙乃をきいかならん
なきや法の姿なからまし
信照法師

かよふ家ふは錦をやきん 旅に旅も
うき旅にはあらし 山あけは鐘

いつの間に旅稼の夢やさめぬらん
世をきく帰りは法くともなし
盛憲法師

さる野の末にまよ川のそかひ
なりぬにたてなし 言に其聞け
本鉄法師

夢さましうき寝乃舟の夜な〳〵
法りききも法家繁昌
良阿法師
舟とめて夜とも寸ひの川上に
おく山なれば庵やあるらん
二品法親王
行く手猶二世里に帰りし遠
法くしの海に弁乃関守
ことにより文のさま戯松浦かく
法も見荒しハ治の世の為
救済法師

是非此身のさいつの務乃法と
この二諦無くうれの二あら世
関白前左大臣
道ハなく彼らうらなくあしへ尊く走
人こそに万顔の事見されけり深
ましめ物くきひの中心誠られ言
とふ句に
後鳥羽院御製
なくハ奴もある道やすらむ

八十七